平成29年度　佐賀県立武雄青陵中学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
高い志と未来を切り拓く力をもち、地域や国際社会の発展に貢献できる、人間性豊かな人材を育成する。 ・　信義礼節を重んじ、情操豊かで、心身ともに健康な生徒を育成する ・　自分の考えに自信を持ち、他を思いやり生き生きと自己表現できる生徒を育成する ・　国際的視野と高いコミュニケーション能力を持つ生徒を育成する	高い志を抱いた生徒一人ひとりの能力・個性を伸ばし継続性を持った中高一貫教育の推進。 ・　学力向上と進路支援の充実 ・　生徒指導の充実 ・　保健・安全指導の徹底 ・　保護者・地域との連携 ・　組織力の向上

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3　目標・評価

①　学力向上と授業改善

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	●学力向上	・指導計画 ・評価計画	・わかる授業・学びのある授業を展開するための計画を策定する。	・指導と評価の一体化が図れる指導計画及び評価計画を策定する。	B	記載事項を統一した書式で作成をして、指導と評価の一体化に基づく指導計画及び評価計画の策定するとはできた。しかし、内容的には改善の余地が残った。	全ての教科で、記載事項を統一した書式を使って、各計画を策定するとともに、新課程を見据えた内容に改善する。生徒への配布まで実施するようにしたい。
		・学習環境	・個に応じた指導ができる環境をつくる。	・TTや習熟度別指導を適宜採り入れるなど、学力差が広がらない工夫を講じる。	B	1年生は数学、理科でTT指導、2年生は数学でTT指導、3年生は国数英で少人数指導を行い、各学年や教科の特性に応じた指導ができた。	指導方針としては、今年度同様に継続して行うが、教科担当者の打ち合わせや教材研究に時間をかけ、さらに効率的な指導を求める。
		・授業改善	・自ら考え取り組む、主体的な学習が身につく指導を行う。	・「めあて」を明示する。 ・授業を振り返る場面を設定する。 ・個別演習、グループワーク、『学び合い』、アクティブラーニングなどの多様な展開を活用する。 ・思考力・判断力・表現力を育む発問や課題を採り入れる。	B	「めあて」の明示は教科によっては不十分であった。話し合いや学び合い、発表、意見交換の場を積極的に設けるなど、様々な工夫をしながら授業を進めることができた。	学び合い、教科横断型の授業の実施、異なる教科担当者とのTT指導（クロスTT）など、新課程を意識した授業改善の必要があり、さらなる授業の工夫・改善を進めていく。
		・授業外の指導改善	・自ら考え取り組む、主体的な学習が身につく指導を行う。	・能力に応じて学力向上が図れるような補習授業を実施する。	C	上位層への補習授業は充実させることができた。下位層にもサポート学習等で支援しているが、まだ不十分である。	青陵タイムについて、担当部署を中心に効果的な活用法を検討する。
		・家庭学習	・家庭学習が充実するよう指導を行う。	・授業と関連付けた課題を与える。 ・宿題の意味ややり方を具体的に指導し、次の学びにつながることを理解させる。	B	家庭学習の重要性を再認識させることが必要である。ただし、課題の質と量については、教科間の理解や調整が必要であった。	課題の在り方について、職員間で共通理解を図る必要がある。質と量を考えていく。
		・学習評価	・適正な評価の実施に努める。	・評価計画を生徒及び保護者に配布し、学習評価について理解を深めてもらう。 ・評価結果について説明責任が果たせるよう、適宜評価方法や評価時期の検証を行う。	B	新たな評価方法を周知して、1年生より順次導入していくことができた。しかし、各教科の評価結果の検証については、もう少し必要であった。	今年度同様に、年度当初に指導計画及び評価計画を作成し、生徒への周知ができるようにする計画である。
	●教育の質の向上に向けたICT利活用教育の推進	・ICT機器の活用	・生徒の授業理解、学力向上に資するICT機器の活用に努める。	・ICT機器の利点を認識したうえで、効果的な場面で積極的に活用する。 ・市販のデジタル教材に加え、汎用性・応用性のある教材を作成し、授業で積極的に活用する。	B	ICT機器の活用頻度は高く、調べ学習等での授業ではもちろん、青陵タイムや放課後で利用している。プリントなどの作成は行っているが、独自教材の完成までには至っていない。	学習用PCや電子黒板等のICT機器については積極的に活用していく。教材については、教科指導の中で必要に応じて作成していく。

② 進路支援の充実

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	・学習支援	・学習習慣の基礎が身につく。	・学習会や宿泊研修の機会を活用し、教科ごとに学習の仕方などを説明する。	B	高校入試のような身近な目標を与えるため、3年生にアチーブテストを導入した。今後は、身近な目標を適宜提示する必要がある。	将来を見据えた進路指導を行い、その夢実現に向けた取り組むをする指導を充実させ、学習意欲の向上へとつなげる。
教育活動	○キャリア教育	・体験活動	・職業観、勤労観が身につく、又は身に付けようと努力する。	・外部講師を活用した職業講話、職場体験、職場見学、また職業調べ等を実施し、仕事や働く意味について考える契機とする。	A	多くの体験活動に取り組ませることができた。大学訪問、職業講話、職場体験等の様々な体験ができ、充実したものとなった。	「探究」の中で計画されている、体験的な活動をより充実させて、引き続きキャリア教育の充実を図る。
		・探究活動	・将来にわたる自己の在り方・生き方について考える。	・調べ学習やディスカッションを採り入れるなど、「探究」の時間を充実させる。	A	各学年の「探究」の活動によって、自己の目標や将来を考える機会を与えることができた。「探究」については、より系統的に計画する必要がある。	中高6年間を見据えた「探究」の活動については、その全体計画の整備をしている。指導の一貫性を担保するため、中高で連携を深めたい。

③ 生徒指導の充実

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・道徳教育	・他者を尊重し、互いの個性を認め合うことができる。	・ふれあい道徳を充実させる。 ・がん教育により、がんを通して命と向き合う。	B	ふれあい道徳については、公開授業を行うとともに講演会も実施し、充実した内容となった。がん教育というよりいのちの教育について、あらゆる場面で実施できた。	道徳については、道徳教育担当者を中心としながら、各教科において、心の教育をさらに充実させていく。がん教育に限らず、いのちの教育を進めていく。
		・礼儀作法とマナー	・率先して挨拶ができ、言葉遣いにも注意を払うことができる。	・登校指導をはじめ日常的に挨拶指導や言葉遣いの指導行う。	A	多くの生徒が明るい元気な挨拶や適切な言葉遣いなどの規律を守りながら、落ち着いた学校生活ができている。	普段の学校生活の中で指導を行っていくが、新入生には、年度当初のオリエンテーション等を活用し、集中した指導を行う。
	●いじめの問題への対応	・いじめの撲滅	・他者の痛みがわかり、正しい判断や行動ができる。 ・いじめゼロの学校にする。	・いじめを許さない学校づくりを目指した生徒会活動や学級活動に取り組む。 ・面談や生活アンケートを活用し、生徒の実態把握に努めるとともに、いじめの芽を早期に発見する。 ・いじめ・体罰等対策委員会において、事案発生時の対応について共通理解を図り、また教職員全体でも共通理解を図る。	B	いじめについては、校務分掌、学年、部顧問、管理職が必要に応じてチームを組み、適切に対応をすることが出来た。また、他者への配慮に欠ける言動に対しては、適切に指導を行った。面談や生活アンケートについては、今後も積極的に実施していく。	通常の学校生活での観察はもちろんであるが、アンケート等により、生徒の状況をは把握するとともにいじめの芽を早期に発見できるよう取り組む。事案が発生した場合は、組織として迅速かつ適切な対応ができる体制つくりを行う。

④　保健・安全指導の徹底

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体つくり	・生活習慣の確立	・３点（起床、学習開始、就寝）固定を定着させる。 ・朝食摂取率を95％以上にする。	・SDノート等を用いて生徒の生活実態を把握し、教育相談などを利用して適切に指導・助言を行う。 ・朝食の摂取状況について調査し、食育だよりや保健だより等で朝食の大切さについて呼びかけるとともに、保護者への協力を依頼する。	B	大多数の生徒は基本的な生活習慣が身に付いているが、学習のリズムが確立されていないなど改善点はある。 朝食の摂取率は、毎日が92％となっている。やや目標に届かなかったが、食べない日が週に1日以下では94％となり、ほとんどの生徒は、朝食摂取が習慣づいている。	学力向上と絡めて生活習慣確立の啓発を行う必要がある。平日の学習時間の目標を2時間以上、休日を3時間以上と設定し、日常的に指導を行っていく。 朝食摂取についても、「食育だより」などを活用し、食の重要性を伝えていく。
		・自己管理	・健康に対する意識を高め、健康の保持・増進に努める。	・健康診断の意義･必要性について事前指導を行い、検診率の向上を図る。 ・健康増進を図るため、健康診断の結果をもとに個人指導に努める。 ・「保健だより」発行などを通して、身近な保健情報を提供する。	B	健康診断について、要再検査の場合は迅速に通知をして受診を勧めている。受診率も高く生徒・保護者ともに健康への意識は高い。「保健だより」を通して、健康の保持増進に関する適切な情報発信ができた。	健康診断や健康の保持・増進については、「保健だより」等を通して情報発信を行っていく。また、自ら健康管理を行えるような啓発活動を積極的にすすめていく。
		・ストレスマネジメント	・心身の健康バランスを考えた生活ができる。	・月に1回実施する生活アンケートや教育相談を通じ生徒の実態把握に努めるとともに、適切な声掛けを行う。 ・いじめアンケートを実施して、いじめの未然防止に努める。	B	スクールカウンセラーによるストレスマネジメント講座を開き、指導を行った。 いじめアンケートは年5回実施し、その中でいじめの認知につながる事案も発見できた。いじめの未然防止を強化し、いま以上に生徒の心をこまめに拾うようにする必要がある。	次年度もスクールカウンセラーをはじめとする心理学の専門家を招聘し、ストレスマネジメントやアンガーマネジメントなどの講座を開いていく。
	○美化活動	・清掃活動及びボランティア活動	・環境・美化意識の向上を図る。	・環境及び美化意識の向上を図るため、日々の清掃活動及び校外清掃活動等を充実させる。	B	通常の清掃活動や校外清掃活動など、意欲的に取り組んだ。また、ボランティア活動にも積極的に取り組んだ。	清掃活動を含めたボランティア活動を積極的に行い、生徒の環境・美化意識の高揚に努める。
	○安全教育	・安全教育	・安全・安心な生活に対する意識を高める。	・不慮の災害等に備え、防火訓練、避難訓練等を実施する。	A	警察、消防などの地域で連携しながら、計画的に実施することができた。安全安心な生活に対する意識を高めることができた。	次年度も関係部署を中心に非常時に備え、計画的に訓練等を実施していく。

⑤　保護者・地域との連携

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○保護者・地域との連携	・情報発信	・学校の教育活動に対する理解が深まる。	・HP、学校だより、学級新聞など、様々なメディアを通じて教育活動に関する情報発信を行う。	C	適宜情報発信することができたが、HPについては、更新が滞ったときもあった。	HPについては定期的な更新を行い、最新の状態を保つように努める。
		・開かれた学校づくり	・地域と学校の関わりを具体化し、開かれた学校づくりを目指す。	・地域や地元自治体のイベントに参加したり活用したりする。 ・地域への奉仕活動を実施する。	B	地域や地元イベントには積極的に参加することができ、多くの生徒が行事に参加した（派遣扱い）。また、地域の行事などに、グランドや体育館など本校の施設を利用してもらうことも多かった。	今以上に地域との関わりを密に行い、さらに地域に愛される学校づくりを目指す。特に、地域連携型の学校行事を計画していく。

⑥ 組織力の向上

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○組織力	・校務分掌	・校務分掌の機能を合理化する。	・次年度の学校運営を見据え校務分掌の見直しを行い、合理的な運営ができる組織を再構築する。 ・業務の偏りをなくす。	B	今年度は校務分掌を大幅に改編し、業務内容を踏まえた組織として、行うことができた。業務内容について、やや不都合な部分も見られたので、修正を行う必要がある。	今年度大きく改編した校務分掌の業務内容について、検証を行い、さらなる業務分担の変更を行い。新しい分掌組織で年度当初から動いていく。
		・組織間の連携	・発生した問題には、チームで迅速かつ的確に対応する。	・学年、校務分掌、管理職の間の連絡を密に行い、情報共有を徹底する。	B	発生した様々な問題に対しては、校務分掌、学年、部顧問、管理職が必要に応じてチームを組み対応出来た。	迅速に対応するために発生した問題の種類によって、どの分掌が主導するのか明確し、連携を密にする。

⑦ 本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上 ○心の教育	・読書活動の推進	・豊かな心と高い志を育成するため、良質な本に数多く触れる。 ・読書習慣が身につく。	・多数の教員による選書を通して、良質な本を数多く購入するとともに、学校だより等で生徒達に読ませたい本を紹介する。 ・2ヶ月に1回図書館だよりを発行し、図書館にある本を紹介して、生徒が図書館に足を運ぶようにする。	B	図書館を利用する生徒が多いが、貸出冊数は昨年度より減少した。読書習慣が身に付いている生徒は少なくはないが、あらゆる場面で読書に親しむ生徒を増やしたい。	図書委員会が作成する「図書だより」を有効活用し、生徒の読書習慣を身に付けさせる。また、職員によるお勧めの本なども、頻繁に紹介するような機会を設ける。
	○グローバル化	・国際交流	・積極的に国際交流に取り組み、異文化理解、自国文化理解に努める。 ・英語によるコミュニケーション能力が向上する。（英検2級・準2級を合わせて70名以上、3級を100名以上にする）	・「探究」の時間を活用し、国際交流の機会を設ける。 ・姉妹校（韓国：華陽中学校）との交流活動を充実させる。 ・様々な国際交流事業を紹介し、積極的な参加を促す。	A	社会情勢を勘案して、姉妹校との互いに訪問は実施しなかった。交流活動としては、手紙の送付のみであった。英検合格者は、準1級が1名、2級が14名、準2級が59名で、準2級以上については目標を達成した。3級は81名にとどまり、目標にやや届かなかったが、生徒の英語を重要視する姿勢は大幅に向上した。	国際社会に貢献できる人材育成のためにも国際交流活動の一層の充実を図りたい。 英検については、準2級以上を70名、3級以上は引き続き100名以上を目標とする。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

生徒の学力については、各学年、各教科とも一定の成果を出すことができた。特に3年生は、高校入試がないことで学習目標を立てずらい状況であったため、武雄高校が作成する「アチーブテスト」を今年度より実施して、武雄高校が求める学力を実感できるような取り組みを実施した。また、授業の工夫・改善と合わせて、宿題の質と量については、各教科、学年で共通理解を図り、連携を密にする必要がある。

生徒の中に、意識・無意識を問わず、他者を傷つけるような言動が見られ、アンガーマネジメントやストレスマネジメントの講座を入れるなど、心の教育の充実を図ってきた。今後も他者の痛みがわかり、他者の存在や考えを尊重できる人材の育成を継続していく必要がある。

今年度は校務分掌の改編を行い、校務分掌の機能の充実と機能性をもたせるために組織の整理をした。校務分掌主導の学校運営を行い、学校としての一貫した教育、中高一貫教育校としての一貫した教育の推進を行った。次年度は、よりこれらの組織を機能的に動かし、合理的な学校運営につなげるための修正が求められる。

各学校行事については、教育課程と関連付けた位置づけが必要である。特に「探究」や「特別活動」での活動については、担当部署を中心に全体計画の策定、計画的な時間の運用、活動内容の吟味等を行い、趣旨に沿った活動ができるよう取り組んでいかなければならない。